

## 一般研究要約

ここに掲載する要約は、文部省科学研究費補助金を2年間継続して受け、1979年3月に完了した教育心理学関係の研究において、研究代表者に報告を依頼し、それに応じて寄せられたものである。

### 幼児の数量概念の形成と教授プログラムの構成

研究代表者：西谷 さやか（玉川大学）

#### 目的

幼児の数量概念が、幼児が日常、普通に出会う環境刺激の下で、どう形成されるかについての調査を、数年前、保育所で実施した(文献(1)参照)。これと対比する形で、数量概念に関する系統的な学習の機会を意図的に与えている2園の幼児のそれが、入園後どう変化するかを追跡し、実際に行われた教授・学習との関連において分析しようとするのが、本研究の第1の目的である。

それは最終的には、その結果を手掛りとして、ATIに基づく複数の教授プログラムを作成することを目指している。その適性として、既存の数量能力パターンと共に、課題解決時のある種の構えをも考慮したい。そこで、テスト場面で幼児が示す解決行動以外の反応の分析も合せて行う。

#### 方法と結果の概要

I、数量概念診断テスト(文献(1))をモンテッソリー子供の家(M園)と生活カリキュラム方式の数教育を行っている幼稚園(J園)の幼児に、3年にわたり5回実施し、1976年の入園から卒園までの教育効果をみた。

① 74年に実施の保育所の調査と比較すると、両園共、媒介を用いた比較、数の保存、多少等判断、10進法の理解など、保育所で達成が低かった項目の進歩で特に優位を示し、系統的教育の効果が認められた。

② M園とJ園の比較では、入園後1年の調査で、M園は長さの系列化、一対一対応による多少等判断などの、J園は数の順序性、計数動作などの進歩が著しく、M園での感覚教具の効果と、J園での数操作導入の効果が、それぞれ推定された。卒園直前の調査では、両園共、すべての項目をほぼ達成しているため、差はみられない。

③ 各幼児の学習行動の観察記録と達成の変化との関係は、目下、分析中。

II、74年の保育所の調査では勿論、M園、J園の卒園前

8か月の調査でも達成率が低かった10進法課題について、理解の水準を弁別する下位課題と教授プログラムを用意し、79年保育所で調査と実験を行った(文献(2))。

① 達成率は一般に、M園、J園の同一年齢児より低い、74年の保育所児より高い。課題材料に関しては、具体物(10個入キャラメル箱)を用いた方が、貨幣の場合より達成が高く、言語課題が最も低い。

② 教授プログラムは、未達成の合成・分解基準課題の下位課題を、言語的援助を与えながら試行させるものであったが、基準課題への転移は成功とは云い難い。すなわち、10進法の理解には、単なる下位課題の反復では不十分と思われる。

III、Iの調査場面での行動観察に基づき、テスト不安に関するチェック・リストを作成した。これを用いてIIの実験中の幼児の行動を記録し、担任教師に対する質問紙の結果及び課題達成との関係を調べた。

① チェック・リストによる行動観察は、質問紙の結果とも、課題の達成とも相関が低い。観察の信頼性(一致度)も高くないので、リストの修正をまたねばならない。

② さらに、達成動機との関連における不安の測定には、上記の手法では不十分で、投影的手法が必要なことが示唆される。

(研究分担者：三浦香苗、秋重恭子)

文献(1) 三浦・西谷「幼児の数量概念と診断テストの作成」千葉大教育学部紀要、第25巻、1976

文献(2) 西谷・三浦「幼児の数量概念についてVI」日本教心学会第21回総会発表論文集、1979

### 語音認知の発達と構音の獲得

研究代表者：松下 淑（愛知教育大学）

#### 目的

子どものことばの発達に関する研究は、その多くがことばの産出に関するものであり、発達初期の語音の弁別・識別など語音の知覚については十分明らかになっていないわけではない。ことばの獲得を記述するためには、